

聖刻群龍伝

龍晴の刻 1

千葉 暁

Satoshi Chiba

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 三好載克

聖刻群龍伝

龍睛の刻1

龍の仔篇 鎮魂の章

プロローグ

第1話 小皇女の憂鬱

第2話 決着

あとがき

218

107 15

5

プロローグ

西方曆一八四六年（帝國曆二四一年）六月二三日、アマールナの王宮にて国太子の誕生日を祝う式典が催された。

この行事は二年前、国民會議の承認を得て、正式な次代のイシュカーク王となることが発表されてから恒例となったもので、今回で三回目となる。

《水晶宮》の広間には諸外国の大使、近隣の国々からは王族が、国内からは貴族や日頃王家と関係の深い郷紳（富農、大商人などの平民有産階級）が詰めかけている。イスカ王室は現王の意向により質素儉約を旨とし、客に対して豪勢なもてなしをするわけではないが、年々客の数が増え、三回目となる今回は、舞踏会が催される大広間が使われることになった。

アスナス・ゼフィールは会場の隅の壁に寄りかか

り、ため息をついた。八月で三五歳になる。世間では働き盛りとされる年齢だが、今日の催しの準備でここ数日ろくに眠ることさえできなかった。

若い頃のような無理は利かないな、と思い知らされる。

目の前に露がついた硝子の器が差し出される。顔を上げるとドレス姿の貴婦人がいた。

アスナスは一礼して受け取ると、ひと息に飲み干した。考えてみれば、今朝方、簡単な食事と共に一杯の茶を飲んで以来、水分を摂った記憶がなく、喉に渴きを覚えていたからだ。

「これほど美味しい飲み物は初めてだ」

「お子さま向けの薄荷水よ。お疲れの様子だから酒精の入った飲み物は控えたほうがよいかなって」

貴婦人は優しい笑みを浮かべて、アスナスの手から空になった器を取り上げる。そしてちょうど通りかかった給仕に預けた。

「済まぬな。大貴族のご当主に酌婦の真似をさせ

てしまった」

アスナスが申し訳なさそうに詫^わびると、

「貴族だからって左うちわでいられた時代は遠い昔に過ぎ去つてゐるのよ。取引相手にお酌^{しやく}ぐらい毎晩のようにしてゐるわ」

ミアは胸を張つて答える。農政改革で多くの貴族が莊園を人手に渡さざるを得なかったが、スイクローヌ家の女当主は織物業で財をなし、イシユカークでも指折りの実業家として名を馳^はせていた。

「やに下がって酌を受けていると、とんでもない契約書に署名させられることになるのだらうな」

「当然でしょ。わたしは安い女ではなくてよ」

冗談のつもりだったが、真実を言い当ててしまったようだ。

「今年も盛況で何よりね」

ミアが会場を見渡して言った。

「お陰^{うたげ}さまで、な。最初は宴^{うたげ}などどう切り盛りすればよいかさっぱりだったが、君の手助けもあり、ど

うにか恰好^{かっこう}がついた」

「あら、わたしが授けた助言は、専門家に任せろつてだけよ。王宮はそれだけで俸給を得ている人たちを大勢抱えているのだから、家宰^{かさい}殿は高所からあれこれ偉そうに指図^{さしず}していればいいのよ。もつとも、その疲れ具合だと、何もかも目を配らないと気が済まない性分は改まっていけないみたいね？」

「そういうことになるかな。職員を信頼していないわけではないのだが……」

「責任感が強いってだけでしよう。融通が利かないのは相変^{あひか}わらずだけど、だから陛下や国太子殿下の信頼を得ているのよ」

アスナスは「ふむ……」と考え込み、

「デュマシオン陛下はともかく、アーカディア殿下はどうであらうか？ 家宰^{かさい}になつてまだ二年、お心を開いていただけるところまで未だ達していないように思える」

「生真面目な返答をありがとう。その様子だと巷^{ちまた}で

評判になつてゐることを知らないみたいね」

果たしてアスナスは「何のことか？」という表情をした。

ミアは広間の人だかりに視線を向けた。中心に黒髪くろかみの少年がいる。見るからに利発りはつそうで、物腰も優雅だ。取り巻く人々から笑みが絶えないのは、優すぐれた会話術を駆使している証拠だった。

「野生児とまで言われたアーカディア殿下を、あなたが非の打ちどころのない貴公子に育て上げたつてことになつてゐるわ」

アスナスは「とんでもない！」と叫んだ。

「殿下はわたしが導くまでもなく国太子としての覚悟を既にお持ちだった。家宰として必要と思える教育の機会を設けたに過ぎない」

「それだけで、人があれほど変わるものかしら？ あなたが家宰になる前は勉強嫌いで教師から逃げ回つていたのよ。読み書きだつて満足にできたかどうか」

ミアの口調にはかすかな当て擦ありがあつた。かつて彼女の被保護者であるルイス・ユーデイスが武術指南役を務めていた時期があつたからだ。学問に比べればはるかに真面目に取り組んでいたようだが、ルイスの指導中、特別な才を発揮することはなかつた。

「用心深かつた、のだらうな。能ある鷹は爪を隠すの言葉通り、才を他者の前で示すことに慎重しんちょうだった。君の息子も薄々感じていたようだ。今の殿下を知つても驚くまいよ。少なくともわたしや教師が胸を張つて誇ほこることではない」

「……………」

ミアはまだ納得がいかない顔だった。アーカディアの変貌へんぼうは別人がすり替わつたと思えるほどだ。むろん行状のすべてが改まつたわけではない。無断で王宮を抜け出し、都のあちこちを徘徊徘徊することは続いているし、名と顔が知れ渡つた分、騒ぎを起こすとあつという間に都中に広まるようになった。だが、

そうした型破りなところも人気の一因になっている。そもそも父親であるデュマシオンからして世間一般が思う君主像から大きくはみ出している。今では帝都留学中に旅回りの職人に化けて、各地の腕利きや有力者と誼を通じ、果ては《シウルティ古操兵》を採し当てたことが逸話として知れ渡っており、むしろ《龍馬帝》の血筋であることを印象づける役割を果たしていた。

国の行く末を思うならば、国太子に人気があることは望ましいことだ。しかし彼女が置かれた立場からすると素直に喜べなかった。

「それはそれとして……」

ミアは話題を変えることにした。

「そろそろ後添えを迎えたら？ 袖や襟が汚れているわよ」

アスナスは自身の袖を見て「こりゃいかん」と叫んだ。服は毎日取り替えているが、風呂に入っていないのですねに汚れてしまう。

「身だしなみは自分で気を遣うさ。仕事に人生を捧げた男の元に嫁いだら不幸せになるだけだ」

自嘲するように答えるアスナスを見て、ミアはまだ遠い国に去った婚約者のことが吹っ切れていないのだと知った。

「宮殿保安隊、まだ辞めないの？」

「規模を縮小させたとはいえ、完全に手から離れるとなると不安が残る。副司令には気の毒だが、後一、二年辛抱してもらおうつもりだ」

国太子が決定した際、同時にいくつかの組織改編が行われた。首都防衛隊は王族の威儀整飾に任ずる儀仗兵と定められ、王族や首都の警護役から外されてしまった。大半の兵員は本来の所属である国軍に戻り、残っているのは一個中隊程度だ。代わって一手に警護任務を引き受けることになった公安隊は大増員され、監督官庁である公安局は国家公安省として昇格し、局長だったロシエ・ランガーは大臣となった。

「本当は軍服を脱ぎたくないだけでなくて？」

ミアが揶揄の言葉をかけると、アスナスは少し考へ込んでから返事をする。

「未練がないと申したら嘘うそになるう。折角、温情で家宰職をくださった陛下には申し訳がないがな」

「温情ですって？ 期待をかけてるからこそその拔擢ばつてきじゃない。国太子の家宰と言え、宰相の地位が約束されたようなものよ」

国太子ともなればただの公子とは扱いが違う。王家の一員でありながら独自に家を興おこし、臣下を持つことも許された。家宰とは王が国太子につける最初の家臣であり、家の一切を取り仕切る役職だ。国太子が幼い場合は養育者、指導者的な責任を負わされており、故に国太子に与える影響が大きく、王位を継いだ際には国政に関与する例が多い。デュマシオンにとつてのローエン・ユーデイスの役割と思えばわかりやすい。彼が武芸指南役に過ぎなかったのはひとえにデュマシオンが第二公子だったためだ。

「むろん、殿下のお役に立てるならば如何なる職も全力で邁進まいしんするつもりでいるが……宰相などわたし如きには務まるまい」

「不安ならばアマルーナの行政長官を引き受ければよかつたのよ。よい経験になったはずだわ」

いわゆる市長だが、都における徴税ちゆうぜいと裁判を司る役職だけに公平無私の人物が求められる。首都防衛隊が解散することを聞きつけた都の有力者は、アスナスに行政長官になるよう懇願こんがんした（任命権は王にあつたが、市民の強い要請ようせいとなれば、聞き届けないデュマシオンではなかつた）。

「行政長官は激務だ。それこそ家宰との兼務は無理だろう」

アスナスは笑いながら言った。

「それに——わたしは分を弁わきまえているつもりだ。これからの時代に求められる政治家とは、社会に根づいた悪習を根絶し、より善き社会を築く改革者であるう。わたしなど、世の中がこれ以上悪くならない

ように見守るのが精々だ」

「あなたが言う『精々』を実行できる者が政の世にどれほどいるかしら？ 国民会議の代議員や政庁の参事官どもを見てごらんなさい。誰も彼も口では綺麗事並べているけど、欲の皮が突つ張つた連中ばかりじゃない——大丈夫、アーカディア殿下が王位をお継ぎになる頃には、いい宰相になっているわ」

アスナスは訝しそうにミアを見て、

「励ましてくれるのはありがたいが……正直、怖くもある。裏があるのならば、はつきり言ってくれるとあれこれ思い悩まずに済むのだがな」

ミアは不機嫌そうに眉を顰め、

「旧い馴染み——いいえ、肩を並べて戦つた戦友を元気づけるのに理由など要らないわ」

「君が王妃殿下の側近でなければ、そしてわたしが国太子殿下の家宰でなければ、その言葉を素直に信じられたのだがな」

腹の探り合いは長く続かなかつた。旧友だけに互いの性格を知り尽くしているからだ。

ミアが脇に抱えていた物入れから紙片を取り出した。活字がびつしり並んでいる。新聞の切り抜きのようなだ。

アスナスは見出しの大きな文字を見ただけで「なるほど」と納得したようにうなずく。

「今朝の新聞だけ……目を通していたのね」

「忙しくても三大紙くらいひと通りな——まあ、そのようなことはどうでもよい」

ここ数年でイシユカークの報道機関は大きく成長した。発行部数や販路の拡大も目覚ましいが、かつての芸能、凶悪事件、上流階級の醜聞といった読み手の興味を引きつける三文ネタが一面記事となることは希となり、堂々と紙面で政治批判を繰り広げるようになっていた。

ミアが持っていた記事も、本日の国太子誕生式典に関するのだが、王妃サクヤーが今年も式典に不

参加であることを取り上げ、その理由として自身が生んだ子ではないアーカディアが王位を継ぐことを快く思っておらず、第二公女スワミーをいずれ女王として擁立するつもりだと報じていた。

「前から『イシユカークの曙』^{あけぼの}は王妃殿下への風当たりが強かったが……いささか内容が過激だったな」

「『いささか』どころではないわ。シヴィルなんてカンカンで手勢を率いて新聞社に殴り込みをかけかねない勢いだったのよ」

あの女官長ならばやりかねないな、とアスナスは毗^{まじり}を吊り上げた形相を頭に想起していた。首都防衛隊長時代から何度となく抗議に怒鳴り込まれ、苦手とする相手だった。

もつともサクヤーがそのような無法を許すわけがなかった。夫であるデュマシオンが言論の自由を認めているからだ。むしろ民衆の立場から政に意見することを歓迎しているようでもある。付け加えるな

らば、王妃と国太子の不仲は市民ならば誰でも知ること、ただ公然と紙面に載せた新聞がなかっただけの話だ。目立った抗議行動は恥の上塗りになりかねない。

「記事がどうわたしに関係するのかね？ 口止めしにきたのなら、通常の対応をするだけと答えておこう」

既に《曙》を始めとして数社の記者から意見を求められているが、取材は式が終了した後に、と退^{しりぞ}けている。言論の自由は尊重^{そんちょう}するが、相手の言いなりになることをアスナスは認めていなかった。

ミアがかぶりを振る。

「万事そつがないあなたに念押しするつもりはないわ。ただ、まわりが騒ぎ立てるようになって、あなたの役割がいつそう重要になったことを自覚してもらおうと思っ出て向いてきたのよ」

「王妃殿下のお指図かね？」

「自発的なものだけど、王妃さまはお怒りにはなら

ないわ。シヴィルの耳に入ったら大変だけど」

サクヤーがアーカディアの王位継承を内心面白く思っていないとしても、王に逆らうつもりは毛頭ない。二年前、《蛮人王》^{ばんじんおう}との最後の戦^{いくさ}から帰国後、夫婦間で議論を尽くした上で決定したことだ。蒸し返すにしても国太子側に相応の落ち度でもない限り難しい。

「王妃さまも前ほどアーカディア殿下を毛嫌いしているわけではないの。殿下もご成長あそばされて随分^{ずいぶん}雰^{ふん}囲^い気が変わられたでしょう？ 表向き反対する理由がなくなっているのよ」

それを聞いてもアスナスは安心できなかった。口外できない裏の理由にこそ憎しみの根が隠されている。それを断たない限り、対立の解消はあり得ないし、時とともに根は深く広がるばかりだ。アーカディアの実母に関わりがあるだろうと、薄々察していたが、王家内の事情であるだけに臣下たる身には対処のしようがない。

「騒ぎは王妃殿下も望んでいない、という受け取り方でよいのか？」

ミアが首肯する。そして「ここからはわたしの推測^{すさめ}だけ」と前置きした上で、

「王妃さまと国太子殿下の対立を煽^{あお}ろうとしている一派がいるんじゃないかと思うのよ」

「ほう、それは聞き捨てならない話だ。今やサクヤー殿下も名実共に国政を預かる身となられた。国太子と争うことになれば国を二分する騒^{さわ}ぎになりかねない」

アーカディアの国太子就任と同時に王妃の権限も見直され、王と同様に国民会議を招集し、非常時のみという制約があるが国軍に号令する権利を得ていた。一年の大半を王が国を留守にしているため実情に即した改正と言えるが、いざ事が生じれば家族内の争いで済まなくなつたことも確かだ。

「で、そのよからぬことを企^{たくら}む一派の正体^{つか}を掴^{つか}んでいるのか？」

「影も踏んでいないわ。ただ、王妃さまにすり寄ってくる人たちの中には公然とアーカディア殿下の悪口を言う者もいるわ。向こうはご機嫌取りのつもりかもしれないけど、こう数が多いと誰か背後にいるんじゃないかって気にもなるわ——ああ、そういう輩は即刻お引き取り願っているから安心して」

アスナスは苦笑する。容易く煽動に乗る輩は信用ならないから追いついてるだけで、国太子に悪意を持っていること自体は追いつく条件に入っていないことがわかるからだ。

「同じ人物がこちらにもきているかもな」

国太子の元にも日々人が押しかけてくる。王妃と違つて何の権限もないが、権力の匂いを嗅ぎつけ甘い蜜を吸おうとする輩にとっては充分魅力的に思えるらしい。アーカディアは滅多に来客の前に出ることはないため家宰であるアスナスが応対している。「確かにひと波瀾あると思う——いや期待している輩は多いかもしれぬ。勝ち馬に乗って出世を

目論んでいるのだろう。貴族は滅つたが、こうしたことに身分は関係ないのだろう」

アスナスはしみじみと語った。

「何の証拠もないけど、わたしはロシエ・ランガーが怪しいと思っているの」

「大臣閣下が？ 王妃殿下に近い立場にあるではないか」

首都防衛隊を潰し、公安隊を取り立てたのはサクヤード。その恩義を考えればロシエが王妃の意に沿わぬ行動を取るとは思えない。

「あいつは信用できないわ。その点ではシヴィルとも意見は一致している。王族間の争いで上手く立ち回って利益を得られる人間なんてそうざらにいるものじゃないでしょう——それと新聞ね」

「『曙』の記事か」

「都の出版物は公安の検閲を受けてるわ。よほどひどい記事でなければ差し止め、回収なんてできないけど、新聞社が公安を恐れているのは確かでしょう。

どこも二の足を踏みそうな記事をあえて載せたのは事前に了承があった、あるいは公安のほうから書くように要請があったって考えられないかしら？」

「可能性で言えば、どんなことでもあり得るな。少なくとも新聞社のほうは認めないだろう」

アスナスは慎重に答えた。大臣、それも公安の頂点にいる相手となると減多なことは口にできない。ましてや国太子の家宰となればなおさらだ。

「まあ、こちらも注意しておこう。王の留守の間に国元で騒ぎを起こしたくはないからな」

そう告げて、話し合いを打ち切ろうとする。正直、宴の席でする話ではなかった。とはいえ、互いの立場からすれば、ふたりだけで逢えればそれこそあらぬ嫌疑をかけられかねない。

ミアにも気持ちを通じたのだろう、ふっと寂しげな笑みを浮かべた。

「お互い年を取って王宮の出入りを止めたらゆつくり昔話でもしましょうか」

「そのためには、長生きしないとな」

「皺だらけになっても嫌わないでね」

最後にそう言つてミアは離れた。かつての戦友の後ろ姿を見つめながらふと思う。

一〇数年前、デュマシオンの従騎士になった頃は、身分や性別の違いはあったが、互いに何の秘密も持たず、イシユカークの未来を熱く語り合う間柄だった。厳しく辛い戦いをどうにか生き延び、国は豊かになり、それぞれ人が羨む地位を得た。しかしこれが若い頃に夢見た理想の世界、自分なのだろうか。

「ダリルよ……おまえがこの場にいたら何と言うかな？」

埒もないと思いつつ、アスナスは夢の途中で死んでいった戦友に語りかけていた。

第1話

小皇女の憂鬱

西方曆1846年10月
帝国曆241年10月



シヌノラ・ミ・ドルベール

1

「——この人たちは、これくらいのことと、どうして大騒ぎするのだろう？」

アーカディアは不思議だった。

少年のまわりには一〇の卓が円状に並べられ、その上にはそれぞれ白と黒の駒が乗った盤面がある。そして一〇人の老若男女が卓についている。一〇対一の勝負だが、開始から四半刻（三〇分）ほどで半分が入れ替わっていた。

「参りました」

またひとり投了すると、取り巻く見物客からどよめきが上がる。

順番を待っていた新たな挑戦者が空いた席について最初の一手を指すと、間髪を入れずにアーカディアが自分の白い駒を動かした。

「相変わらず早いな。適当に指してるのかな？」

見物人が呆れたように呟く。試合開始からアーカディアは相手が誰であろうと、どのような盤面だろうと瞬時に次の手を指していた。

「適当で全勝できるものか」

隣の見物人が不思議をなじるように言った。

「一〇人同時となれば早指しになるのも当然だが、それにしても早過ぎる。あれでは考える暇もないではないか」

傍から見れば神業に映るだろうが、アーカディアにはどうということもない。一〇人同時とはいえず、手が早い者もいれば遅い者もいて待ち時間はある。その間に頭の中で一〇の盤面を検討して自分が次に指す手を絞り込んでいく。予測が外れることは百にひとつ程度で（定跡を知らない素人のほうが先読みしづらい）時間をかけずに指すことができた。名人級の棋士ならば可能な芸当だが、一〇人を相手取ってとなると、やはり神業と言えるだろう。

もつともアーカディアに自分の才をひけらかそう



という意識は皆無だ。ただ大勢の対局希望者を短い時間で相手する方法はこれしかなかった——ただそれだけの理由だ。

事の発端は去年の誕生日の宴だった。歓談中、最近将棋を習い覚えたことを告げると、客のひとりが「是非、お手合わせを」と望んできた。話ばかりで退屈していたところだったので会場に駒と盤を用意させて勝負をした。

対局を願った男は国太子に近づく口実を探していただいで腕前のほうは並程度で、あっさり勝ってしまった。本来ならばそこで終わるところだが、腕自慢の者はどこにでもいるらしく「我も」と名乗りを挙げてくる者が何人も顕れた。しかもその中に一年連邦首都で催された全国大会にイシユカークの代表として出場したトレボーが混じっていたことが面倒の始まりとなった。アーカディアは相手のことをまったく知らず「他より手応えがあったな」程度の認識しか持たなかったが、名人にも完勝したことで

翌日の新聞に大きく書き立てられてしまった。

世の中が安定し、生活水準が向上すると娯楽が盛んになる。中でも将棋は戦略や戦術を含んだ奥深い知的遊戯として旧帝国の頃から貴族階級を主として愛好家が多く、新連邦結成の翌年には二〇〇年以上の歴史を誇る将棋協会が活動を再開している。昨今の隆盛を支えているのは郷紳階級で、さらに安価な駒や盤が出回ったことで低所得者層にまで裾野が広がっている。今や将棋に強いことは人々の尊敬を勝ち得る芸のひとつとなっていた。

イシユカークの国太子が名人のひとりを倒したとなれば評判となるのは当然で、今年の誕生日会でも対局を願う客が大勢顕れるのが予想できた。しかし宴の主役が将棋ばかり指しているわけにもいかず、家宰のアスナスから一刻（二時間）以内という時間制限が設けられた。対局者を高段者に限るのが一番単純な解決法だが、宴の座興としては無粋だし、選から洩れた客に不満が残る。そこでアーカディア

が考えたのが一〇人同時に相手をする事だった。

半刻（一時間）あまりで三〇人近い挑戦者を退け
ると、ようやく空席ができるようになった。当初希望者はもつといたのだが、アーカディアのあまりの強さに尻込みした者が出たからだ。しかし最後にして最強の挑戦者が待っていた。

口髭を鼻の下にたくわえた四〇代の貴族風の男が卓につくと、見物人から「おお」とどよめきが上がった。

「王者ビリティス卿だ！」

一昨年と昨年の全国大会覇者だ。イシユカークの王宮関係者はルーフェンに赴くことが多く、全国大会を観戦した者が少なからずいた。

王者の到来に、まだ対局を続けていた者たちが逃げるように投了して卓から離れた。

アーカディアは悠然と座るビリティスを見て「何の真似？」と訊いた。

「殿下がトレボーを打ち負かしたと聞きまして――

アマールナまで足を運んだのは酔狂とお考えください」

《龍馬帝》の息子にして、次代のイシユカーク王と知るだけに丁寧な口調だが、目つきや言葉の端々に「たかが一二歳の子どもだろう」という侮りが感じられた。

だがアーカディアは気づく様子もなく、「いや、どうして最後のひとりになるまで待っていたのか、という意味で訊いたんだけど？」

ビリティスはむっとした表情になり、

「対等の条件で勝負をしたいからです」

王者としての矜持が言わしめた言葉だが、アーカディアには通じない。「そう」と興味なげに答えただけで駒を並べ直し始めた。

周囲の見物人から失笑が生じると元帝国貴族は怒りに震えた。

（少しばかり指せると思って増長しおって！ こてんぱんに叩きのめしてくれる！）

空いた卓が片づけられ、アーカディアと王者の一騎討ちが始まった。

相変わらず国太子の指し手は早い。こうなるとビリテイスも王者の意地にかけて長考できない。

あつという間に一〇数手を数えた。

「うっ」

王者の手が止まった。定跡通りと思っていたアーカディアの指し手が途中からまったく予想だになかった方向に転じたからだ。これまで数十人との対局を見て技量を見極めた（みきわ）と思っていたビリテイスは慌てた。

（な、何なんだ……こいつは？）

将棋は指し方に人格が出るといふ。これまでの対局で国太子は、正面からまっしぐらに敵陣に攻め込むという若い指し手にありがちな、恐れを知らない戦法で通してきた。強引ながら負け知らずなのは一手一手に無駄がなく、的確に相手の反撃を潰（つぶ）していったからだ。先を読み切る予測力は大したものだが、

どつしり守りを固めれば付け入る隙（すき）はいくらでもある。殿様芸にありがちなことだが、格下との対局ばかりしてきたのだろう。高段者と対局した経験が少ない——あつても手加減してもらっていたに違いない。ならば百戦練磨の自分が負ける道理がない、と確信していた。

しかし今盤面上の駒の配置は当初頭に描いていたものとはまるで違った。奪った駒の数はほぼ同じだったが、逆に自分が国太子の陣に深く攻め込んでいたのだ。

（攻め込ませられた？ 王者であるわたしが？）

動揺（どうよう）したビリテイスは失策を重ねた。一度組み上がった駒の配置を、自分本来の型に戻すなど無理な話だ。対するアーカディアは的確に、かつ容赦（ようしゃ）なく追い詰め、王手をかけた。

「ま、負けました……」

苦渋の顔で王者が投了するまでそう時間はかからなかった。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。